

# 武道における「事理一致」に関する一考察

——華嚴宗思想に着目して——

金 炫勇\*・矢野下 美智子\*

## On the Theory of 'Jiriittchi' found in the Martial Arts

—— Focusing on the Kegonshu Thought ——

Kim HYUNYONG and Michiko YANOSHITA

**Key words** : 武道伝書 Budō Denshō, 武道 Budō, 沢庵宗彭 Takuan Sōhō, 事理一致 Jiriittchi, 華嚴宗思想 Kegonshu thought

### 1. はじめに

日本から発信された剣道、柔道、合気道、空手道などをはじめとする日本伝統の身体文化は、今や武道をとおして国際社会に広まっている。日本武道の国際的な普及に伴い、欧米では日本の武道思想に着目した研究が多くみられ。その主流を示しているのは日本武道における禅仏教の影響である<sup>1)</sup>。

日本武道と禅仏教の影響について欧米の研究者<sup>2)</sup>は、禅仏教は沢庵宗彭（1573–1646）という僧侶によって武術に取り入れられたと指摘している。沢庵の日本武道への貢献について、鎌田は「日本の武道史の中で武道の哲学を打ち出したのは柳生宗矩を指導した沢庵禅師である」<sup>3)</sup>と言い切っている。また仏教哲学が武道に与えた影響について Graham Priest は「日本武術は禅仏教の僧侶沢庵宗彭によって仏教哲学と結びついた。そして空手道や剣道など日本の武道は今日もその考え方を受け継いでいる」<sup>4)</sup>と指摘している。さらに、東アジアの武道（空手道、剣道、テコンドー、ウーシュー）が受けた思想について、仏教思想の八支聖道から説明している。Graham Priest の見解は東アジアの武道思想全般を八支聖道（八正道とも）という仏教思想をもって解釈しており、アジアの武道思想全般と仏教思想との関係を把握する上で大変参考になる研究である。しかし Graham Priest の欠点は日本武道が沢庵の禅の影響を強く受けていると述べるながら、その背景となる沢庵の著書や思想及び禅の影

響を受けた江戸初期の武道伝書については一切触れていないことである。

また、Tae-sik Kim et al.<sup>5)</sup> は日本武道における禅仏教の影響について武道が受けた禅仏教の理論を説明することは非常に難しいと指摘した上で、西洋哲学、特にデカルト哲学やアリストテレス哲学を用いて日本武道における禅思想と比較している。Tae-sik Kim et al. の見解は日本の武道思想を文化相対主義の立場から解釈しており、西洋哲学にも東洋の禅思想のような哲学があることを示唆する興味深い研究であると考えられる。しかし Tae-sik Kim et al. の欠点は Graham と同様、日本武道における禅仏教の影響をテーマとしながら禅仏教の影響を受けた江戸初期の伝書や武道の成立に甚大な貢献をした沢庵の作品及び思想については一切触れていないことである。

本来軍事的な道具として発展してきた武術が武道へと昇華する直接的なきっかけは、僧侶沢庵宗彭（以下、沢庵）と剣術家柳生宗矩（以下、宗矩）という二人の出会いからスタートする。日本の武術史をみると、鎌倉時代から武士たちは仏教の僧侶たちから生死を惜しまない態度を学び彼らの武術に取り入れようとする姿がみられる。その結果、鎌倉時代以降の武術には仏教的な儀式や修行法を取り入れた身体技法が多くみられる<sup>6)</sup>。しかし仏教思想を武道伝書に取り入れて兵法を理論的に説明しようとしたのは江戸初期からである。

江戸初期の武道伝書は、兵法を説明するため仏教思想から何を取り入れたのだろうか。沢庵の思想と著作に注

\* 広島文化学園短期大学保育学科

目する必要がある。沢庵は日本仏教史の中で江戸時代を代表する学僧として知られており、多くの仏教作品を残している。沢庵の著作は今日、『沢庵和尚全集』（全6巻）『日本の禅語録』（第13巻）などに収録されている。沢庵は禅仏教思想から武術を解釈した書簡（『不動智神妙録』『太阿記』）を柳生宗矩に渡している。沢庵と宗矩との出会いによって剣術（新陰流）と禅仏教の関係は深化し、やがて武術は武道へと昇華するのである<sup>7)</sup>。沢庵の思想は新陰流だけではなく、同時代の剣術家宮本武蔵や伊藤一刀斎、また柔術家寺田頼重（年歴不詳）や寺田満英の著書にも甚大な影響を与えている<sup>8)</sup>。

沢庵が禅仏教を用いて剣術や柔術に与えた武術の極意とは何だろうか。柳生宗矩著『兵法家伝書』（1632）、宮本武蔵著『五輪書』（1645）、伊藤一刀斎の弟子古藤田俊直の孫俊定著『一刀斎先生剣法書』（1653）、寺田頼重著『無明住地煩惱諸佛不動智』（1649）や寺田満英著『無明書』（1674）などに共通する用語の一つに「事理一致」がある。いずれの書も「事理一致」を用いて剣術及び柔術の極意を語っている。このように「事理一致」という用語は武道伝書を解釈する上で欠かせないキーワードにもかかわらず、その解釈は難解または抽象的とされる用語である<sup>9)</sup>。

湯浅<sup>10)</sup>は「事理一致」について「他の武道伝書を読み進めていくにあたって避けて通れないものであり、これが解釈できればあとの伝書は比較的に楽に読みこなせる」と指摘している。角<sup>11)</sup>は「事理一致」の現代的な意義について、「『事理一致』とは、技の稽古という実践と道理の思索とが、両輪のごとく調和して営まなければならない教えである。さらに角<sup>12)</sup>は「わざの探求に伴う心の精錬は稽古に取り込む心の構えにまで発展できる」とし、「事理一致」を今日の剣道に生かす具体的な方法として「①剣道とは何か、②なぜ一礼して道場に臨むべきなのか、③道着・袴の着方をいかに考えるべきなのか、④竹刀とは何なのか、⑤何故に厳しく苦しい基本稽古をするのか、⑥打ち込み・懸かり稽古はなぜ重視されるのか、⑦有効打突の真の中身とは何なのか、⑧相手に打たれるのはなぜか、⑨人の生涯と剣道はどう結びつくのか」など「事理一致」の教えを具現化している。角の提案は剣道のみならず武道全般に当てはまる内容であり、芸道と言われるすべての領域においても言えることであろう。

以上のことから明らかなように「事理一致」は日本の武道が「人格形成の道」を提唱する以上、吟味しなければならない課題であると考えられる。

## 2. 研究方法・時代設定

「事理一致」という概念は本来仏教思想に由来するものである。臨済宗の僧侶であった沢庵は、仏教思想から事理概念の影響を受けている。そもそも「事理」とは華嚴宗思想にみられる用語である<sup>13)</sup>。鎌田は『不動智神妙録』

には『華嚴経』の思想が多くみられると指摘している<sup>14)</sup>。そのため「事理一致」を解釈する仏教思想としては、『華嚴経』の内容を把握する必要がある。『華嚴経』は後に華嚴宗思想として発展し、道元の『正法眼蔵』や親鸞の『教行信証』の思想に影響を与えている<sup>15)</sup>。この華嚴宗思想を近世初期の武道伝書を解釈するテキストとして適切であると考えられるもう一つの理由は、華嚴宗思想がヒナヤナ仏教、マハーヤナ仏教、終教、頓教などの仏教思想全般を包括的に取り入れ、自分の立場を圓教（仏教思想全般を包括的に取り入れた教え）と定義しているからである<sup>16)</sup>。本稿で華嚴宗思想のすべてを網羅して述べることはできない。論を展開する上で、本稿では、華嚴宗思想から事理一致を説明することに焦点を絞る。

沢庵は生涯多くの著書を残している。そのすべての作品を言及することはできない。本稿では「事理一致」と直接的な関係がある『不動智神妙録』を主な資料としながら、沢庵が与えた武道思想について考察を進める。さらに、沢庵の影響を直接受けた柳生宗矩著『兵法家伝書』（1632）を始め、宮本武蔵著『五輪書』（1645）、伊藤一刀斎の弟子古藤田俊直の孫俊定著『一刀斎先生剣法書』（1653）、寺田頼重著『無明住地煩惱諸佛不動智』（1649）や寺田満英著『無明書』（1674）を主なテキストとする。

2008年の学習指導要領の改訂とともに、武道は60年ぶりに中学校の体育分野の領域として必修化されたことは周知の事実である。今回の改訂では、技能の習得のみならず、文化や伝統を取り入れた学習を定めている。つまり、武道の伝統的な考え方を正しく伝えることが急務であるといえよう。本稿は近世初期の武道伝書における「事理一致」の概念を明らかにし、その本来の意味を現代武道に提案することが目的である。以下の順に考察を述べる。

- ① 先行研究から問題を指摘し、「事理一致」に対する新たな解釈が必要である理由を述べる。
- ② 沢庵が用いた「事理一致」の本来の意味を華嚴宗思想から解明する。
- ③ 沢庵の書簡とその影響を受けた伝書らにおける事理論を比較し、江戸初期の武道伝書における「事理一致」の概念を解明する。
- ④ 最後はまとめとして現代の武道における「事理一致」の意味を述べる。

## 3. 先行研究

近世武道伝書における事理論に着目した研究としては大保木（1982）の「武芸における気論に関する諸問題」がある。大保木<sup>17)</sup>は「事理一致」を伝書にみられる認識論の一つとして捉え、氣に着目し「天地万物の本質は『気』であり、自然的所与としての身体が万物の根源であり生の源である『気』の働きそのものになったとき『事

理一致』して活性化された《身体》となる」と述べている。その解釈の根拠として沢庵の『理気差別論』の一部を取り上げられている。しかし、『理気差別論』そのものが儒学（主に朱子学）を利用して禅仏教の教理を説明した仏教擁護論であることを考えると、朱子学から解釈する以前に沢庵の思想が現れていると考えられる華嚴宗思想から「事理一致」を解釈する必要がある。儒学では宇宙の原理を「理」と「気」で説明しているものの、沢庵はマハーヤーナ仏教の形而上学の「空」あるいは「無心」で説明している<sup>18)</sup>。そのため『理気差別論』より武道哲学の形成に甚大な影響を与えたとされる沢庵の書簡『不動智神妙録』から確認する必要があると考えられる。大保木の研究は日本の武芸において気概念がどのように変容していたのかを考察する上で大変参考になるものである。しかし、日本の武道伝書が儒学を用いるようになったのは儒学者山鹿素行の台頭からである<sup>19)</sup>。

また、湯浅による「近世武芸伝書における事理論について」もあげられる。湯浅<sup>20)</sup>は近世初期から中期にかけて成立した剣術伝書における事理論について考察している。特に、一刀流伝書の一つである『一刀斎先生剣法書』の事理論を解釈しながら「剣術における心法論（わざと心の関係論）を述べるにあたっては仏教の事理論を積極的に取り入れている」<sup>21)</sup>と指摘している。湯浅の研究は江戸初期から江戸中期にかけての武道伝書の事理論を網羅しており、武道伝書における事理論の変遷を考察する上で大変参考になるものである。特に江戸初期の事理論と江戸中期以降の事理論の理論的構造（仏教なのか儒教なのか）を明らかにした功績は特記すべきことである。しかしながら、江戸初期の武道伝書の事理論は仏教に由来するものであると指摘しながら、仏教の事理論の立場に立たず辞書的な意味で事理論を解釈しているところは難点である。

また竹田<sup>22)</sup>は、事理について、「そもそも事理もしくは理事の語は中国華嚴宗の教理を代表する言葉の一つである。『一刀斎先生剣法書』にいう事理とはその意味するところは異なるが、事と理とが不即不離の関係にあるという発想は一致する」としながら、事理論を解釈するに当たってクルト・マイネルの理論<sup>23)</sup>を用いて、「『事』は習熟の位相をもち練習対象としての目的運動であり、『技術』ではなく課題解決のために遂行された運動経過や運動形態、あるいは『技』と理解できる。また『理』は『技』の道理と考えることができる。この『技』は最高に習熟した運動経過や運動形態としての『技』であり、これを構成する理論と理解できる」<sup>24)</sup>としている。竹田らは解釈が難解といわれる『一刀斎先生剣法書』を古典学の成果を活用し現代語訳を施しており、その成果は後の研究者にとって第一資料となっている。その一方で、マイネル以前の仏教思想から事理を正しく解釈する必要がある。つまり、歴史的な解釈の変遷を踏まえた上で、文

化相対主義の立場から伝書の事理論を比較することが手順だと考える。

また田中<sup>25)</sup>は、事理を解釈するに当たって「湯浅見氏の御著書『武道伝書を読む』に誠に優れた御論考が有り参考にさせて頂いた」と述べており、湯浅の見解から事理論を解釈している。田中は江戸初期の『一刀斎先生剣法書』『五輪書』と江戸中期の『天狗芸術論』を比較し『天狗芸術論』にみられる高い境地は江戸初期の『一刀斎先生剣法書』『五輪書』において既に語られていると指摘している。

また中嶋<sup>26)</sup>は今日の柔道の祖とも言える直心流柔術の伝書『無明住地煩惱諸佛不動智』や『無明書』における『不動智神妙録』思想の受容過程を研究し、直心流柔術の伝書は『不動智神妙録』から甚大な影響を受けていることを指摘している。中嶋の研究は今日の柔道の心法論が「事理一致」の理論を基盤としていることを提案する貴重なものであると考えられる。

以上の先行研究はそれぞれの立場から事理を解釈している。湯浅や Henrich Dumoulin<sup>27)</sup>が指摘するように、武道伝書における事理論は江戸中期以降儒教（朱子学）の影響を強く受け変遷していく。

本稿は事理論が変容・変遷する以前の江戸前期の伝書、その中でも武術を武道へと昇華させるきっかけになった沢庵の『不動智神妙録』を始め、『不動智神妙録』からインスピレーションを受けた柳生宗矩の『兵法家伝書』、宮本武蔵の『五輪書』、一刀流の伝書『一刀斎先生剣法書』、今日の柔道のもっとも古い伝書とされる寺田頼重の『無明住地煩惱諸佛不動智』や寺田満英の『無明書』を中心に「事理一致」を解明していく。これらの伝書は禅仏教思想の影響を強く受けている。江戸前期の伝書における事理論を正しく解釈する手がかりとして、まず華嚴宗思想の事理論を確認してから伝書における事理論を解釈することにする。華嚴宗思想は膨大な量を持つ学問である。本稿では武道伝書と関わりがあると考えられる華嚴宗思想の事理概念に限定して考察をすすめる。

#### 4. 『華嚴経』における事理論

『華嚴経』は真理の世界、眞如の世界、理の世界を中心としながら菩薩としてなすべき実践（菩薩道）を説いたものである。『華嚴経』の冒頭は毘盧遮那仏から始まる<sup>28)</sup>。ここでは釈尊の心の内なる覚りの中でみられた不思議な光景が説かれている。その描写によると現実の巨大な世界は「無礙」と「縁起」の理法によって成り立っているとされる<sup>29)</sup>。また、空・無自性を根本としていることが説かれている。本稿では「事理一致」を把握する手がかりとして、まず縁起の無限の世界を説明する。

##### 4.1 縁起の無限の世界

毘盧遮那仏が覚りの中でみた世界は次のようである。



一つの毛穴（毛孔）に十万三世の仏が存在し、  
 各々の仏には無量の菩薩らがまわりにいて、それぞ  
 れ法を説いている。一本の毛先に、無量の仏国土が  
 存在していて、それらの仏国土は、それぞれその広  
 大な空間を少しも損ねていることはない。一切の仏  
 刹は微塵に等しく、爾所の仏は一毛穴に坐し、皆な  
 無量の菩薩衆有りて、各の為に貝さに普賢の行を説  
 きたまう。無量の刹海を一毛に処し、悉く菩薩の蓮  
 華坐に坐し、一切諸の法界を遍満して、一切の毛孔  
 より自由に現ず。過去、現在、未来が現在のこの瞬  
 間に融通・包摂し、また、三世（過去、現在、未来）  
 が同時頓起する<sup>30)</sup>。

このような光景はさまざまな表現の中に繰り返し説か  
 れている。毘盧遮那仏品が説こうとするのは我々の日常  
 をはるかに超える巨大な界であり、毘盧遮那仏の巨大な  
 心が説かれている<sup>31)</sup>。我々の考えをはるかに超える表現  
 をもとにして重 重 無 尽 の相即・相入（じゅうじゅうむじん そうそく そうにゅう）  
 とした華嚴の哲  
 学を生み出している。この世界を一言で言えば、事物と  
 事物とが妨げなく融け合っているという事事無礙、事理  
 無礙（じじむげ むげ ぼっかい）の世界である<sup>32)</sup>。事事無礙、事理無礙の世界は「四  
 法界」によって詳しく展開されている。

## 4.2 四法界

四法界とは、『華嚴経』を解釈する中で華嚴宗の教理  
 として定着したものである。華嚴の法界について、はじ  
 めて着眼したのは初祖の杜 順（557-640）である。四法  
 界が杜順の著述であるのか、または誰かが杜順の真意を  
 うけて、その遺徳を宣揚するために書き記したのかは分  
 かっていないが、『法界観門』という書物がある。この内  
 容は真空、事理無礙、周徧含容という三重の見方を説い  
 ている。この杜順の三つの法界観によって解釈が難解と  
 なっている『華嚴経』の真理が簡潔にまとめられている。  
 この法界観を継承しながら四種法界の体系を確立させた  
 のが華嚴宗の第四祖澄観である。澄観（738-839）は人  
 間の心の理想態として自性清浄心たるべき「一心」とい  
 う概念を説いている。さらに、現実に存在する一切のも  
 のとの関係交渉を明らかにするために四法界を体系化し  
 ている<sup>33)</sup>。四法界は①事法界、②理法界、③理事無礙法  
 界、④事事無礙法界の4つに分類される。以下、順に詳  
 述していく。

### 4.2.1 事法界の世界

事法界とは、個々の事象のことでそれぞれが他と区別  
 される世界のことである。例えば事として、松もあれば  
 竹もあり、梅もあれば桜もある。またウグイスとホトト  
 ギスの鳴き声はそれぞれ差別・相違・分限がある。しか  
 しそれは対象物としての松や竹、ウグイスやホトトギス  
 ではない。それは私がある時ある場所で見ている松や竹  
 であり、私がある時ある場所で聞いたウグイスやホトト

ギスの鳴き声である<sup>34)</sup>。個々の事は物心二元論（主-客  
 二元論）で言う主体と分離し、固定された関係ではない。  
 主-客相関の中に成立する特定の自象の世界が事法界で  
 ある<sup>35)</sup>。一言でいわば事法界はある特定の場所やある特  
 定の時間に私が具体的に体験する多様で豊富な世界であ  
 る。それにもかかわらず我々は自分が出会う生の真実  
 に向か合わないのである。このように個々の事象の世界が  
 事法界である。武道に言い換えれば技や知識のことであ  
 る。

### 4.2.2 理法界の世界

理法界は個々の事象の本質・本性（ほんしつ ほんしょう）  
 のことである。竹  
 村<sup>36)</sup>は「一般的に理とは道理・法理のことであると言わ  
 れるが、これはあくまでも辞書的な意味であり華嚴宗で  
 いう理とはそれらをさらに超えた諸法に対する法性、い  
 わゆる真性のことをいう」と指摘している。また鎌田  
 ら<sup>37)</sup>は「理とは事に対することばであり、理体とか理性  
 といわれるものである。この理体を現象界に対しての本  
 大界のように理解することは仏教を正しく認識したもの  
 とはいえない」と述べている。このように仏教学による  
 と、理を「事の道理・法則」として捉えた先行研究は武  
 道伝書の事理論を正しく解釈したとはいえないのである。  
 竹村<sup>38)</sup>は事法界と理法界の違いについて、「事法界で述  
 べたように事は個々の事象のことであり、一般的に対す  
 る個別的、普遍的に対する特殊的特質をもつものである。  
 これに対し、理は一般的・普遍的の側に相当するも  
 のである。しかもその普遍性はどんな意味でも限定され  
 ない最高度に広いものである。理は絶対に対する絶対で  
 あり、事は絶対に対する相対である」としている。

このように理法界は我々の概念的思惟をこえたもので  
 あり、その本性は無自性・空であるという立場である<sup>39)</sup>。  
 この理法界に存在する理は『般若心経』の「色即是空、  
 空即是色」の空に相当する言葉でもある。しかし、なぜ  
 空を色と表現しているのだろうか。色は個々の事象のこ  
 とであり、空は普遍的な空性ではないのか。これは、理  
 は空そのものも否定するということである。そのため、  
 真空は絶対空、空空といわれるのである。つまり理法界  
 や『般若心経』でいう「空」とはすべての相から完全に  
 解かれ自由になった「静中動、動中静」の境地をいうの  
 である。このようにすべての相から完全に解かれ自由にな  
 った境地を華嚴宗では「無礙」といっている。空はす  
 べての相から完全に解かれ自由になっているため、すべ  
 てをあらゆる概念として考えられているのである<sup>40)</sup>。つ  
 まり、理法界は個別的に存在する事（色）の普遍的原理  
 である空性の世界について説かれており、この空性の世  
 界は我々の概念的思惟ではなく直観を通してさとする真理  
 であると考えられる。武道に言い換えれば心や空のこと  
 である。

### 4.2.3 理事無礙法界の世界

理事無礙法界は理と事とが礙げあうことなく融合して

いる世界である。『般若心経』の言葉を借りると、「色即是空、空即是色」の世界である。色と空が別々にどこかにあって一つになるのではなく、もとより「色即是空、空即是色」であるように事と理も同様であることか説かれている。四法界ではこれまで事法界と理法界を区別して説いてきたものの、理事無礙法界に至っては理と事とが礙げあうことなく融け合っていると説いている。竹村<sup>41)</sup>は事理の関係を桜と木との関係を例えて、「桜は特殊であり、木は普遍である。桜は木から離れず、桜は木であるから桜と木は一つである。しかし桜は特定の種類の木であり、木はあらゆる種類の木を含む。この点では二つが異なるものの、桜は木の中の一つですから木とまったく異なるとはいえないのである。こうして両者の間に同じともいいきれないが違ってもいいきれないという非一・非異の関係をみることができる」と説明している。

「理」と「事」あるいは「事」と「理」の間にも唯識思想が主張する非一・非異の関係をみることができる。そのため、理事無礙法界では事即理・理即事（相即・相入）の関係が成立すると説いている<sup>42)</sup>。ここで現象世界を離れた原理の世界、原理の世界を離れた現象の世界の成立やその存在を徹底的に否定する華嚴宗思想の基本立場を確認することができる。これは個々の事象を離れたアイデアの世界が存在すると考えるプラトン哲学や朱子学の理気二元論とは全く異なる立場である。そのため沢庵の『不動智神妙録』をはじめ、その影響を受けた江戸初期の伝書を朱子学の理気二元論の立場から解釈することは間違いであると考えられる。

#### 4.2.4 事事無礙法界の世界

四法界の最後に至る境地は事事無礙法界である。ここに至ると真如・法性ともいわれる理、相対に対する絶対ともいわれる理は消えてしまうのである。こうして残った事の世界の各々の事象は互いに礙げあうことなく融け合っていると説いている。本来事は時間的にも空間的にも個別・特殊であり、各々の特殊性の分限があるものと捉えられる。しかし、事事無礙法界では事は決して物ではなく、実体的な存在でもない。それは空性を本性としているものの、その空性は究極の普遍にも他ならず、しかも事は理と一つになっているので本性を通じて他の一切の事と融け合うことができると説いている。また事は個々独立して成立するものではなく、他の事とのさまざまな関係（縁起、性起）のもとに成立すると説いている。ある事は他の事なしには存在せず、他の事あつてのある事ということになる。このような事態が成立する理由は個々の事が空性を本質とし、無自性を本質とするからである<sup>43)</sup>。鎌田らは「慈悲の心、大悲の動きがあるから事事無礙法界が可能になる」<sup>44)</sup>と述べている。

また竹村<sup>45)</sup>は各々の事は互いに礙げあうことなく融け合っている「事事無礙法界」について、「松は竹であり、

竹は松である。また海中の魚は天上の星であり、天上の星は山寺の柿の実である。またあなたは私であって私はあなたであるというような世界が広がる。こうして既成の分限にとらわれず、種々の事が真に交流し合い交響し合う生命の世界が眼前に開けてくる。見た目には遠く離れたもの同士でも、実は深い緊密な関係の中にあるという実相が説かれている」と説明している。

このように華嚴宗思想は四法界の説明を通して、真の理の世界は個々の事象の本質・本性である「理」さえ消え、時間的にも空間的にも個別・特殊であり、特殊性の分限である各々の事が互いに礙げあうことなく融け合っていると説いている。つまり華嚴宗思想の基本立場は「現象絶対論」<sup>46)</sup>であるといえる。現象に対する直観から出発し、その究極の原理をさとした後再び現象へと帰っている。つまり、出発点と終着点が現象である。

#### 4.3 華嚴経思想における事理論

華嚴宗思想の事理論をまとめると次のように整理できる。事理論は『華嚴経』を解釈した華嚴宗思想の一つである「四法界」で説かれている。「四法界」では仏が悟った後見た真の世界を四つ（①事法界、②理法界、③理事無礙法界、④事事無礙法界）の段階で説明している。まず目に見える事（現象、技）の世界（事法界）と、目に見えない理（空性、心）の世界（理法界）をそれぞれ説いてから現象の世界と空性の世界が礙げあうことなく融け合う世界（理事無礙法界）を説いている。最後に事事無礙法界では理（空性）が消えた世界にも各々の事は互いに礙げあうことなく融け合うことができると説いている。各々の事は互いに礙げあうことなく融け合うことができる理由は、個々の事が空性を本質とし、無自性を本質とするからである。

本稿では詳細に取り上げないものの、事事無礙法界の論理構造をより詳しく解明した「十玄縁起無礙法門義」（十玄門）がある。これは賢首大師法蔵（643－712）の『華嚴五教章』の中に所収されている。『華嚴五教章』は華嚴宗のもっとも根本的な聖典といわれている<sup>47)</sup>。十玄門は四法界の展開を踏まえた上で、ある関係の基本的構造を「異体」と「同体」という用語を用いて説明している。簡単に説明すると次の通りである。

基本的には事理と同じく異体と同体が礙げあうことなく融け合うことを説いている。しかしながら、異体の中の「体」と「用」の関係と同体の中の「体」と「用」の関係を独自の言葉で説明している。「体」と「用」とは、まったく別のものではない。あるものは無自性・空であればこそ、他に関係して作用できるのであり、他に関係し作用していることは、それが仮有にして無自性・空だということで、体と用とは別ではない。そこで、体を言えば、そこに用もあることになり、用を言えば、そこに体もあることになる。また、異体は互に異なるもの同士

の関係であり、同体は一つのものの中で多様な要素の間  
の関係である。十玄門は、異体と体と用の関係を「相  
即・相入」、同体と体と用の関係を「一即多・多即一・  
一中多・多中一」と表現している<sup>48)</sup>。異体と同体の関係を  
を事理に変えて考えると、なぜ「事理一致」というの  
が理解できる。また一刀流の伝書『一刀斎先生剣法書』  
がいう「千刀一刀、万剣一剣の秘密」<sup>49)</sup>が理解できるの  
である。『一刀斎先生剣法書』は事理を正確に解釈したと  
き「千変万化」することができると述べているからである。  
一般的に武道の世界で「事理一致」という時、事  
(わざ)と理(こころ)が同等に成長する意味として用いられ  
るが、華厳宗思想では事にも理にもこだわらないことを  
説いているのである。沢庵を中心とする江戸初期の武道  
伝書における「事理一致」はより広い概念として用いら  
れていたと考えられる。

## 5. 伝書にみられる事理論

本節では、江戸初期の武道伝書における事理論を確認  
することが目的である。前述したとおり、江戸初期の武  
道伝書は沢庵という僧侶の影響を強く受け、禅仏教の立  
場から各々の兵法を書いている。筆者が江戸初期の武道  
伝書に着目した主な理由は、日本武道思想史において初  
めて武術から武道へと衣替えする姿がみられるからであ  
る。江戸中期頃になると徳川政府が儒学(主に朱子学)  
を政治的に強調する中<sup>50)</sup>、武道伝書の内容も変容を余儀  
なくされる。江戸中期以降の武道伝書は、合理的な技術  
論や指導論に重点をおいて書かれている。無論江戸中期  
以降の武道伝書に、心法論がないとはいえない。むしろ、  
江戸初期の武道伝書の心法論を踏まえながら発展してい  
く姿もみられる。たとえば佚斎樗山の『天狗芸術論』『猫  
の妙術』は舌打ちするほど深い心法論がみられる<sup>51)</sup>。し  
かし佚斎樗山も江戸初期の武道伝書の影響を強く受けて  
おり、江戸初期の武道伝書は以降の伝書のバイブルに  
なっている。江戸初期の武道伝書はその解釈が難解ある  
いは抽象的だとの指摘がある。それは仏教思想が強く反  
映されているからである。本稿が着目した武道伝書にお  
ける「事理」も仏教思想、特に『華厳経』の教理である  
「華厳宗思想」から借りた用語であると考えられる。その  
ため華厳宗思想という事理論をまず解明する必要がある  
ため、これまで具体的に述べてきたのである。本節では  
華厳宗思想の事理論を基盤に江戸初期の武道伝書におけ  
る事理論を解明していく。江戸初期の武道伝書として用  
いたのは沢庵の『不動智神妙録』<sup>52)</sup>をはじめ、宗矩の  
『兵法家伝書』、武蔵の『五輪書』、古藤田俊定の『一刀斎  
先生剣法書』、寺田頼重の『無明住地煩惱諸佛不動智』、  
寺田満英の『無明書』などである。

### 5.1 『不動智神妙録』と『兵法家伝書』

沢庵が書いた『不動智神妙録』は、それまでの日本武

術を武道へと昇華させる発端になっている。その発端は、  
沢庵と柳生宗矩の出会いから出発する<sup>53)</sup>。『不動智神妙  
録』(以下、『不動智』)にみられる事理論は次のようであ  
る。

理之修行、事之修行、と申す事の候。理とは右  
に申上候如く、至りては何も取あはず、唯一心の  
捨やうにて候。段々右に書付け候如くにて候。然  
れども、事の修行を不仕候えは、道理ばかり胸に  
有りて、身も手も不働候。事之修行と申し候は、  
貴殿の兵法にてなれば、身構の五箇に一字の、  
さまの習事にて候。理を知りても、事の自由に  
働かねばならず候。身に持つ太刀の取まはし能く候  
ても、理の極り候所の聞く候ては相成間敷候。事理  
の二つは、車の輪の如くなるべく候<sup>54)</sup>。

また『兵法家伝書』(以下、『兵法書』)にみられる事理  
論は次のようである。

一理の事、向構の時の心懸、鑢の時の心持也。  
無刀の用心。右の一理と云ふは、兵法のかくしこと  
を業也。太極の兵法には、如可様にも自由なる物  
也。さしつめたるきびしき事、一大事也。そこをよ  
く心にかけ、こまかに目を付けて、ほかとした事  
にあはぬ用心する所を、一理と云ふ也。太刀にて  
もむかふがまへに、ちかへとさしあてゝ居たり、鑢  
を五寸一尺にさしむかふたりなどする時の用心、是  
を一理と云ふ也。わがうしろに、がべ・ついちなど  
ありて、ひかれぬ時、むかふよりさしあつる時など  
の用心也。一大事、一難儀の所と心得べし。無刀の  
時、五寸一尺のはづし、目を一所にすべ、心を一所  
にすべ、心を一所にとゞ、油断しては中々成らざる  
事也。か様の事を心にかくるを、一理と云ひて秘密  
する所也<sup>55)</sup>。

『不動智』は「理とは右に申上候如く、至りては何も取  
あはず、唯一心の捨やうにて候」と、理は何ごとにもと  
らわれないことであり、ただ心の捨てよう如何である  
とっている。また理の修行は大事であるものの、事の  
修行をしないと道理ばかり知っていて手も身体も思うよ  
うに動かない、だから事と理は車の両輪のように、二つ  
そろっていなければ役に立たないといっている。しかし  
『不動智』から甚大な影響を受けたとされる『兵法書』は  
事理という概念を特別に設けて説明しているわけではない。  
『兵法書』には「一理の事」という箇所がみられる。  
「一理の事」とは「一心」することである。「一心」につ  
いて同じ新陰流伝書『新陰流兵法心持』(1632)には、次  
のように書かれている。

兵法は一心のはたらきにきわまる也。そのみちを



たんれん心にかけ候へば、おもひのほかにも、しかけ、手だて、工夫いできたるもの也。それは習のほかもあるべし<sup>56)</sup>。

ここでいう「一心」とは何ごとにもとらわれない心であり、これまで述べてきた華嚴宗思想の教えである。『兵法書』は事理についての議論がほとんどみえないため『不動智』の事理思想からはそれほどの影響を受けなかったと考えられる。しかし『兵法書』「捧心の心持の事」にて心を「空」にすることを強調している。

空とは、かくしこと葉也。秘伝すべし。空とは、敵の心を云ふ也。心は、かたちもなく色もなくして、空なる故也。空唯一を見るときは、敵の心を見ようと云ふ義也。仏法とは、此心空をさとり事也<sup>57)</sup>。

この空の内容は華嚴宗思想や『般若心経』の「空性」を想起させるものである。つまり『兵法書』は『不動智』の事理論から直接影響を受けていないものの、沢庵から華嚴宗思想の影響を受けたと考えられる。

## 5.2 『一刀斎先生剣法書』

『一刀斎先生剣法書』（以下、『一刀斎』）は伊藤一刀斎の門人古藤田俊直の孫俊定が書いたものである。『一刀斎』は一刀流の秘伝書として多くの剣術家に愛読され、『武道叢書』（1915）や『剣道集義』（1923）<sup>58)</sup>にも載せられている江戸初期の伝書の一つである。『一刀斎』は冒頭から事理論を用いて剣法書を述べており、その内容は剣法を形而上学のレベルまで高めている。『一刀斎』にみられる事理論は次のようである。

夫れ当流剣術の要は事也。事を行ふは、理也。故に先づ事の修行を本として、強弱・輕重。進退の所作を、能く我が心脉に是を得て、而る後其事敵に因て転化する所の理を能く明らめ知るべし。たとへ事に功ありと云ども、理を明に知らずんば勝利を得がたし、又理を明に知たりと云ども、事に習熟の功なきもの、何を以て勝つ事を得んや。事と理とは、車の両輪・鳥の両翅のごとし。事は外にして、是形也。理は内にして、是心也<sup>59)</sup>。

『一刀斎』は事理とは「車の両輪・鳥の両翅のごとし」と述べており、『不動智』の内容とはほぼ同じといえる。そのため『一刀斎』を書いた古藤田俊定は『不動智』を入手して参考にしたと考えられる。その内容をみると、『一刀斎』の方がより深いものであり、事より理を強調している。一方で、「理を明に知たりと云ども、事に習熟の功なきもの、何を以て勝つ事を得んや」といっており、事（わざ）の方が理より先であることを強調している。『一

刀斎』はあくまでも剣法書であること、本末転倒してはならないことを強調している。この考え方は『不動智』から受けたものであると考えられる。また「事→理→事」に戻る四法界を想起させる内容でもある。なお「車の両輪・鳥の両翅のごとし」というのは事理が互いに礙げあうことなく融け合うという華嚴宗思想も想起させる。『不動智』の影響を受けた事理論は『一刀斎』に至っては「事理一致論」として定着したと考えられる。

## 5.3 『五輪書』にみられる事理論

『五輪書』には事理論への展開がみ受けられない。『五輪書』の内容は実践に生きた武蔵ならではの考え方で満ち溢れている。『五輪書』の序文の最後に執筆の心掛けを次のように書いている。

仏法・儒道の古語をもちからず、軍記・軍法の古きことをもちひず<sup>60)</sup>。

また『五輪書』「独行道」の「仏神は貴し、仏神たのまず」<sup>61)</sup>の箇所をみると徹底した合理主義者であり無神論者でもあるような書き方をしている。鎌田は武蔵のこの言葉について、次のように解釈している。

坐禅をしていたとき、雲の間から光が見えた。それは仏の光明のようであった。武蔵は剣を抜いてその光を斬った。そのとき、仏を殺したのであった。仏を殺したとき、武蔵は万理一空を見た。まよいの雲の晴れたところを見た。それが武蔵の悟りであった。かくして「仏神は貴し、仏神たのまず」という「独行道」の言葉が生まれたのである<sup>62)</sup>。

柳生宗矩が沢庵和尚から禅の影響を受けたとすれば、武蔵は春山和尚から禅の影響を受けたとされる<sup>63)</sup>。武蔵が『五輪書』を執筆する前、霊巖洞で坐禅を組んで歌い続けたといわれる歌がある。

坐禅して工夫もなさず床の上に只徒らに夜を明かすな。振りかざす太刀の下にこそ地獄なれ一と足進め先は極楽<sup>64)</sup>（下線は筆者が引いたものである。）

まるで地獄と極楽が紙一重であることを悟ったような歌である。『五輪書』の哲学を一言でいわば「万理一空」である。「空」はすでに述べた華嚴宗思想の「空性」である。一見、合理主義者や無神論者のようにみえる「仏神は貴し、仏神たのまず」という『五輪書』の言葉は華嚴宗思想からもみられるものである。仏教で「仏さえ殺せ」というのは肯定のための否定である。華嚴宗思想という「空性」とは「絶対空」であり、どこにもとどまらないことである。禅の否定にもみえる『五輪書』序文の

内容は、実は真の空性（悟り）を熱望する武蔵の心の現われであると考えられる。『五輪書』と事理論との関係は確かに薄い。しかし「事理一致」がいおうとする「事にも理にもとどまらない」ことは『五輪書』では「万理一空」の思想として説かれているのではないかと考えられる。

#### 5.4 『無明書』にみられる事理論

江戸初期に書かれた『無明住地煩惱諸佛不動智』（以下、『諸佛不動智』）は直心流柔術の伝書として伝わっており、寺田右平次正次という人物が高橋右太郎へ贈ったものとされる。しかし、寺田右平次正次が実在の人物かは不明のため、『無明書』を書いた寺田満英であるという説と『諸佛不動智』を書いた寺田頼重の息子であるという説がある<sup>65)</sup>。『諸佛不動智』は十一項目で構成されており、後の『無明書』に甚大な影響を与えている。『無明書』は寺田満英が延宝2年（1674）8月に櫻井孫九郎へと送った伝書であり、その内容は十五項目で構成されている。『諸佛不動智』の事理の内容と『無明書』の内容はほとんど変わらない。しかし『無明書』は「柔術の部」を設け、『諸佛不動智』の事理論から柔術の心法論を書いている。中嶋は、直心流柔術の伝書は『不動智』から直接影響を受けていると述べている<sup>66)</sup>。『無明書』にみられる事理論は以下のようである。

理之修行、事之修行と云事有。理とは右に如有至り、至ては何も取あはず唯一心之捨様なり。段々右に書付け如有至。然れども事之修行をせず道理計胸に有ても手も働す事之修行と云は兵法にてなれば身構三ヶ九ヶ様々之習之事也。理を知ても事を自由に働か子ば不成、身持太刀之取まはし能ても理之極る処くらは成間敷候。事理之二つは車の両輪之可為如。（第四項目、不動智の部）

柔にても同、手之遺様、足之遺様、身之遺様、能習知れば惣じて人者負る事はいや成物故、熟したる手足強成、能働故理もそれにつれて働事なれば、不習人よりも尤はやし、四肢身体共に強に依て能勝ぞ。されども理なくして事計なれば譬云ば、すまふに同じ事也。大事之命唯今捨るか生るか之処にて勝不足たるべし。危き事也。理を能究其理に所作を能しませよ、事理車之両輪之如くならば危かるまし。（※第四項目、柔術の部）<sup>67)</sup>

『無明書』は「不動智の部」と「柔術の部」に分けて事理論を展開している。「不動智の部」の事理論は『不動智』の内容とほとんど変わらなく事と理は相補的な関係にあると述べている。一方、「柔術の部」をみると、事の修行に対して理の修行が重視されているようにみえるものの、最後には「事理車之両輪之如くならば危かるまし」

と述べている。つまり『無明書』「柔術の部」においても華厳宗思想を思い出せる事理論が展開されており、剣術家の心性を説いた『不動智』の心法を柔術論の修行法として再構成したものであると考えられる。『諸佛不動智』や『無明書』をみる限り、江戸初期にすでに柔術から柔道へと昇華したものがみられるのである。

#### 5.5 伝書の事理論のまとめ

武道伝書の事理論は、沢庵という臨済宗僧侶によって『不動智』に取り入れられたものである。そして『不動智』は柳生新陰流の宗矩に渡され日本の武術が武道へと昇華するきっかけになっている。しかし、宗矩の『兵法書』には事理論がみられない。その代わり『不動智』の「一心」「空」思想から影響を受けたと考えられる。「一心」「空」とは華厳宗思想の「事事無礙法界」を表す言葉である。華厳宗思想における「事理」「一心」「空」とは「どこにもとどまらない心」「何かにこだわらない心」の境地である。

また『兵法書』に事理論はみられないものの、どこかに偏らない「一心」「空」思想を元に剣術の心法論が書かれている。その思想体系には、華厳宗思想が反映されている。そして一刀流の伝書である『一刀斎』には『不動智』の事理論がより深化した内容がみられる。『一刀斎』は冒頭から事理論を取り入れ、「事（わざ）にも理（心）にもこだわらないこと」を説いている。『一刀斎』を書いた者は『不動智』を入手し参考にしたと考えられる。

また、『五輪書』に事理論への展開はみられない。『五輪書』の序文に書かれた武蔵の執筆の心掛をみる限り、仏教思想や儒学思想の影響を完全に否定する書き方をしている。しかし『五輪書』全般に満ち溢れている「万理一空」思想は華厳宗思想の一つである。「万理一空」は「事理一体」「一心」「空」と通じる言葉であり、武蔵も「事（わざ）にも理（心）にもこだわらないこと」を説いているのである。

また直心流柔術の伝書とされる『諸佛不動智』や『無明書』は『不動智』から強い影響を受けている。順番的には『諸佛不動智』が『不動智』の影響を直接受け、『諸佛不動智』は後の『無明書』に影響を与えている。『無明書』は柔術にも事理論を取り入れ、「事（わざ）にも理（心）にもこだわらないこと」を説いている。『無明書』をみる限り、江戸初期に柔術から柔道へと昇華した姿がみられる。

### 6. 「事理一致」の現代的意味

本稿は武道伝書の中でも、もっとも根本的思想の一つと言われる「事理一致」の思想を華厳宗思想から解釈することを試みた。「事理一致」を華厳宗思想から解釈した理由は、伝書における「事理論」が沢庵という臨済宗僧侶によって始めて取り入れられたものであり、沢庵が用



いた「事理」という用語はそもそも華厳宗思想を代表する用語であるからである。

一般的に「事理一致」とは、「技の稽古という実践と道理の思索とが、両輪のごとく調和することを指す。また、身と心の高度な調和を目指す言葉」<sup>68)</sup>としても用いられる。つまり「事理一致」は心と身が一致することである。心と身が一致した精神的な境地は日本武道を目指す精神世界であるが、近年の脳生理学の研究成果により心と身が一致した時、最大のパフォーマンスが発揮できることが明らかになっている<sup>69)</sup>。そのため「事理一致」は抽象的な理論ではなく、武道学習において目指す最高の境地であるといえる。照屋<sup>70)</sup>はそれを「人の本当の強さ」と述べている。おそらく伝書を書いた者はその境地を体験したのであろう。

また「事理一致」は勝利至上主義に走る今日の武道界に警鐘を鳴らす言葉でもある。歴史的には剣術、柔術と呼ばれていたものがなぜ剣道、柔道といわれるようになったのかに注目する必要がある。武道になった理由は単なる闘争方法としての武術ではなく、人間の道として深い精神的意義のあるものと自覚したからである。勝敗にこだわるスポーツとしての武道は、それ自身に目的価値をもつものではなく、勝つための手段としての価値しかもたないのである<sup>71)</sup>。それでは「事理一致」した武道にならない。武道が人間の道そのものとして、それ自身に目的価値をもつところに武道の価値があることを忘れてはならないのである<sup>72)</sup>。それを教えてくれる用語が「事理一致」であろう。武道に携わる者は礼儀正しいというイメージがある。しかしながら、そこには大きな落とし穴がある。武道の礼儀はただ形式にとどまる危険性をはらんでいるからである。「事理一致」は心から礼儀正しくなることを説いている。近年武道界を囲んだ様々な不祥事は「事理一致」の本来の意味を軽んじて解釈してきた結果ではなかろうか。

## 要 約

本研究では武道思想における「事理一致」の概念を取り上げ、江戸初期の武道伝書からその本来の意味を解明することを試みた。武道伝書における「事理論」は抽象的な内容であり、その解釈が難しいとされるものである。しかしながら、「事理論」は武道伝書とその思想を読み取る上で、避けて通れない概念である。一般的に「事理一致」とは、技の稽古という実践と道理の思索とが、両輪のごとく調和すること、または身（体）と心の高度な調和を目指す言葉としても用いられる。しかし、武道伝書に用いられた「事理一致」の概念は、その一般論を超える意味を持っている。武道伝書における「事理論」は沢庵宗彭という臨済宗僧侶によって用いられたものである。剣術の世界を禅仏教に結び付けて解釈した沢庵の書簡『不動智神妙録』は、柳生宗矩に渡され日本の武術が武道

へと昇華するきっかけになっている。『不動智神妙録』の中心思想の一つが「事理一致」論である。

本研究は武道思想における「事理一致」の概念を再解釈する手がかりとして「華厳宗思想」に着目している。「事理一致」を「華厳宗思想」から解釈した理由は、武道伝書における「事理論」が沢庵宗彭という臨済宗僧侶によって始めて取り入れられたからである。また、沢庵が用いた「事理」という用語はそもそも「華厳宗思想」を代表する用語であるからである。その結果、「事理一致」は事（技）と理（心）を共に修行する意味だけではなく、事（技）にも理（心）にもとどまらない、こだわらない境地を説いていた。つまり「事理一致」は勝利至上主義に走る今日の武道界に警鐘を鳴らす用語であり、武道が「人間形成の道」であることを喚起させる用語でもある。

## 注及び引用文献

- 1) 大保木輝夫：武芸における「気」に関する諸問題：身体論的視座から、武道学研究, 16 (3), 15 (1984)
- 2) E. J. Harrison: The fighting Spirit of Japan, Overlook Press, pp. 123-141 (1982) Donn Draeger and Gordon Warner: Japanese Swordsmanship, Technique and Practice, Weatherhill, p. 57 (1979) Tae-sik Kim, Allan Bäck: Martial Meditation: Philosophy and the Essence of the Martial Arts, International Council on Martial Arts Education Press (1989)
- 3) 鎌田茂雄：禅の心 剣の極意：沢庵の不動智神妙録に学ぶ、柏樹社, pp. 139-141 (1986)
- 4) Graham Priest: The Martial Arts and Buddhist Philosophy, Philosophy and Sport, 17-28 (2013)
- 5) Tae-sik Kim and Allan Bäck: Martial Meditation: Philosophy and the Essence of the Martial Arts, International Council on Martial Arts Education Press (1989)
- 6) 4) に同じ, 17-28
- 7) 4) に同じ。
- 8) 中嶋哲也：直心流柔術における『不動智神妙録』思想の受容過程, スポーツ科学研究, 9, 206-233 (2012)
- 9) 田中 宏：宮本武蔵『五輪書』について（補遺2）『一刀斎先生剣法書』他との比較, 近世初期文芸, 24, 57-70 (2007)
- 10) 湯浅 晃：『武道伝書を読む』, 日本武道館, pp. 107-117 (2001) 『一刀斎先生剣法書』からはより深化された事理論が見られる。
- 11) 角 正武：月刊「武道」, 5月号, 47-52 (2006)
- 12) 11) に同じ。
- 13) 鎌田茂雄・上山春平：仏教の思想6 無限の世界観〈華厳〉, 角川書店, p. 195 (1996)
- 14) 3) に同じ。
- 15) 玉城康四郎新装版：『華厳入門』, 春秋社, p. 160 (2003)
- 16) 竹村牧男：『華厳とは何か』, 春秋社, p. 10 (2004)
- 17) 大保木輝夫：武芸における気論に関する諸問題, 武道学研究, 15 (2), 33-34 (1982)
- 18) Henrich Dumoulin・Translated by James W. Heisig and Paul Knitter: Zen Buddhism: A history, Word Wisdom, 2, p. 279 (2005)

- 19) 18) に同じ, p. 284
- 20) 湯浅 晃: 近世武芸伝書における事理論について, 天理大学学報, 151, 33-49 (1986)
- 21) 湯浅 晃: 近世武芸伝書における事理論について - 2 -, 天理大学学報, 154; 195 (1987)
- 22) 竹田隆一・長尾直茂: 『一刀斎先生剣法書』訳注及びスポーツ教育的視点からの考察 (1), 山形大学紀要 (教育科学), 13 (2), 51-52 (2003)
- 23) Kurt Meinel 著・金子明友訳: 『マイネル・スポーツ運動学』, 大修館書店 (1981)
- 24) 22) に同じ。
- 25) 田中 宏: 宮本武蔵『五輪書』について (補遺 2) 『一刀斎先生剣法書』他との比較, 近世初期文芸, 24, 57-70 (2007)
- 26) 8) に同じ。
- 27) 21) に同じ, 195-206。18) に同じ, p. 279
- 28) 竹村牧男: 『華厳とは何か』, 春秋社, p. 26; p. 40 (2004)
- 29) 13) に同じ, p. 118
- 30) 竹村牧男: 『華厳五教章を読む』, 春秋社, pp. 13-14 (2009)
- 31) Garma C. C. Chang The Buddhist Teaching of Totality, London and Aylesbury Compton Printing, p. 8 (1972)
- 32) 30) に同じ。
- 33) 13) に同じ, pp. 116-117
- 34) 28) に同じ, pp. 185-186
- 35) 28) に同じ, p. 186
- 36) 28) に同じ。
- 37) 13) に同じ。
- 38) 28) に同じ。
- 39) 28) に同じ。
- 40) 瓜生津隆真: 『龍樹一空の論理と菩薩の道』, 大法輪閣, p. 183 (2004)
- 41) 28) に同じ。
- 42) 28) に同じ。
- 43) 28) に同じ, pp. 189-190
- 44) 13) に同じ, p. 231
- 45) 28) に同じ, p. 190
- 46) 鎌田茂雄: 『華厳哲学の根本的立場』, 法蔵館, p. 436 (1960)
- 47) 28) に同じ, p. 197
- 48) 28) に同じ, pp. 199-215
- 49) 今村嘉雄: 『日本武道大系 第二巻・剣術 (2)』, 同朋舎, p. 268 (1982)
- 50) 18) に同じ, p. 279
- 51) Issai Chozanshi・Translated by William Scott Wilson: The Demon's Sermon on the Martial Arts and Other Tales, Kodansha, pp. 15-32 (2006)
- 52) 8) に同じ, p. 207
- 53) 3) に同じ, p. 24
- 54) 3) に同じ, p. 88
- 55) 柳生宗矩著・渡辺一郎校注: 『兵法家伝書一付 新陰流兵法目録事一』, 岩波書店, pp. 73-75 (1985)
- 56) 55) に同じ, p. 118
- 57) 55) に同じ, pp. 86-87
- 58) 国書刊行会: 『武術叢書』, 国書刊行会 (1915) 山田次郎吉: 『剣道集義 続』, 水心社 (1923)
- 59) 49) に同じ, p. 261
- 60) 鎌田茂雄: 『五輪書』, 講談社学術文庫, p. 28 (1986)
- 61) 60) に同じ, p. 19
- 62) 60) に同じ, p. 22
- 63) 60) に同じ, p. 32
- 64) 60) に同じ, pp. 32-33
- 65) 8) に同じ, p. 209
- 66) 8) に同じ, pp. 208-209
- 67) 8) に同じ, pp. 227-230
- 68) 8) に同じ。
- 69) 11) に同じ, 47
- 70) 照屋太郎: 人の「本当の強さ」の意味—武道, 芸道の達人の境地を考える立場から—, 体育・スポーツ哲学研究, 32 (2), 83-98 (2010)
- 71) 西谷啓治編集『講座 禅』(第五巻 禅と文化), p. 184 (1974)
- 72) 71) に同じ。

## Summary

The purpose of this study is to clarify the theory of 'Jiriittchi (事理一致)' found in Budō Denshō (the Books of Martial arts) in the Early Edo period. It is said that the theory of 'Jiriittchi' found in Budō Denshō is an abstract and difficult concept. However, the theory of 'Jiri (事理)' is important concept in interpreting Martial arts thought and Budō Denshō. Commonly 'Jiriittchi' is used as a word that the practice and way is united like a wheel. And it is used as a word as body-mind connection or interact. But the concept of 'Jiriittchi' found in Budō Denshō is beyond common opinion. The theory of 'Jiri' is introduced by Zen master Takuan Sōhō of Rinzaï school. The Mysteries of the Unmoved Prajñā (Fudōchishinmyōroku), in which Takuan interprete military arts with Zen relation is sent to Yagyū Munenori. It makes a sublimation from Military arts to Martial arts. One of the central thought of the Mysteries of the Unmoved Prajñā is the theory of 'Jiriittchi'.

I took note of 'Kegonshu thought (華嚴宗思想)' to reinterpret the theory of 'Jiriittchi'. The cause is that the theory of 'Jiri' is introduced by Zen master Takuan of Rinzaï school and essentially 'Jiri' is a term to represent 'Kegonshu Thought'. As a result, 'Jiriittchi' has been preached as concept getting rid of obsession in 'Ji (事)' or 'Ri (理)' as well as body-mind connection or interact. That is, 'Jiriittchi (事理一致)' is a concept raising alarm about sport for winning and arousing that Budō is 'a path to self-perfection'.